

周囲を3つの海に囲まれる北海道では、ほとんどの沿岸で昆布を採取することができます。現在の昆布生産量の95%は北海道産。日本全国、産地と遠く離れた沖縄県まで、昆布は身近な食材として利用され、愛されています。なかでも「羅臼昆布」は濃厚な旨味の出るだしが取れ、希少品でありながら関東・関西・北陸などの高級料亭で使われることが多い昆布です。

いま、知床羅臼町観光協会では、この羅臼昆布の漁業の歴史を伝えるためのエコツアーを実施しています。各関係機関・団体とともに知床世界自然遺産地域の利用のあり方について話し合いを進めながら、2014年(平成26年)から2018年(平成30年)までモニターツアーを行い、その意義と課題を検討し、より高度な知床の利用の仕方について考えようという取り組みです。来年度以降も本格的なツアーの実施と継続を目指しています。

本展は、このエコツアー開催に合わせて、明治時代から現代まで続く羅臼の昆布漁の写真を、歴史や当時の時代背景とともにご紹介いたします。

なお、本展開催にあたり、写真の貸し出しや情報提供ならびに本ギャラリー改修作業にあたって、羅臼町民の皆様にご多大なご協力をいただきました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

主催：一般社団法人 知床羅臼町観光協会

協力：羅臼町郷土資料館、写真のご提供をいただいた

元赤岩・知床岬住人の皆様

*解説パネル本文中は、敬称略とさせていただきます。ご了承ください。

*年や年代表記は西暦表記とし、括弧書きで年号を付記しております。

第1章 羅臼昆布の歴史

東北海道における昆布漁のはじまり

北海道は、幕府が道南部に松前藩を配置する江戸時代初期まで、アイヌ民族の人たちが独自の文化を発展させながら暮らしていた島でした。

江戸幕府はアイヌとの交易を含め、国内の海上交易を本格化させていくために、17世紀中頃、大阪と蝦夷地（北海道）を結ぶ商船航路を開発します。18世紀には、日本列島の各地を経由して北海道から沖縄までが結ばれ、国内物流の大動脈航路を商人たちと様々な物が行き来していました。起点・大阪からは米・酒・塩・紙・木綿などの生活物資、蝦夷地からは昆布、ニシン、サケ、マス、タラなどの海産物が「弁財船（べざいぶね）」、今で言う「北前船」によって運ばれました。昆布は蝦夷地からの大事な商品の一つであり、天皇への献上品としても使われていました。

藤野家による昆布場の開設

弁財船の航路の最終地点として根室場所が設けられ発展しはじめた時、根室地方では、エゾマツ（「唐檜」）が一番の主力商品で、漁業は雑魚が中心でした。しかし、1831年（天保3年）に屋号「又十」を持つ近江商人・藤野喜兵衛が根室場所の単独の場所請負人になったことで、根室地方の漁業に転機が訪れます。

藤野は日高国ホロイツミ（現えりも町）に和人監督、アイヌ漁夫たちを研修に送り、1832年（天保4年）根室のオキネップ・歯舞に昆布場を開設します。しかし、初めての昆布生産は輸送費と見合わず失敗しています。当時の製法では根室国の昆布の生産は安定しなかったようです。なお、昆布場開設の同年、目梨場所も藤野家の経営となり、羅臼・標津周辺ではサケ・マス漁業が本格的に行われていくことになりました。

その後、1850年（嘉永3年）、四代目藤野喜兵衛がオキネップ・歯舞・瑠瑠瑠に改めて昆布場開設を行い、成功を収めたことから、根室でも昆布の出荷が盛んになっていきます。

場所請負人制

江戸時代、蝦夷地（北海道）を支配していた松前藩は蝦夷地を区画し、家臣に給与として米を与える代わりに、アイヌとの交易権や漁業権、場所を家臣に割り当て、その利益を給与とさせました。これを「交易場所請負制」といいます。当初は藩主や藩士たち、やがて商人たちが経営を任されていきます。明治維新後、この特権は廃止されますが、漁業に関しては権利構造が長らく守られたため、新しい開業や移住には厳しい制限がつきものでした。

開拓使時代

羅臼昆布のはじまり

1868年（明治元年）に明治維新が起こり、幕府の支配が終わったことで、場所請負人制が廃止され、全道の資源生産地が開拓使函館使庁の管理課へ置かれることになりました。1876年(明治9年)には、「漁業改革」がおこなわれ、漁場持制度も廃止されました。一般志望者が国から漁業権と場所を分け与えてもらえるようになり、植別村（現羅臼町）にも本格的に和人（本州出身者）の移住が始まります。

羅臼町史によると、1905年（明治38年）、羅臼産昆布を大阪へ出荷したところ高値で売れたことから徐々に採取する者が増え始めたということです。羅臼村の初代村長・村田吾一の聞き取りでは、1910年（明治42年）に、辻中実義、阿部平吉ほか2名が協力し、植別村の「ケンネベツ」に初めて昆布番屋を建てたといわれています。辻中は根室への昆布の海上運輸、阿部らは昆布づくりと、役割分担が行われていました。輸送航路がきちんと確立されたことによって、羅臼の昆布漁業が大きく飛躍していったと言えるでしょう。

大正・昭和初期

羅臼昆布製法の確立

羅臼の昆布は製品になるまでに20以上の工程を経ています。そのなかで徐々に昆布の色と旨味が凝縮され、最高級品と言われる「羅臼昆布」が出来上がります。肉厚で巨大な羅臼昆布ならではの丁寧な作業が必要な昆布づくり。その方法は、大阪市昆布商同業者組合会長で辻商店店主だった辻善之の強い依頼によって、1930年代ごろに確立されました。昆布漁師の阿部平吉は、それ以前の作り方は「原始的」と言っています。それまではヒレ刈りも、念入りなしわ伸ばしも行われていなかったようです。

昭和七年[1932年]一月十八日当地出発大阪の辻商店を訪れましたところ大変喜ばれ歓待をうけ、(...)一週間ばかり御やっかいになりました。その間に、羅臼昆布の製法の改良話が再三出てきました。とりあえず「シワノシ」と尾ヒレの赤葉をとることを約束出来れば、三割方高値に引取りましようと言うことであった。かえってから組合と水検の長谷川さんにこのことを話し要請しましたところ、魚組の役員諸氏も大変乗り気になられて、それゞ道庁の許可を得て、大阪の人気も上々となりました。

(阿部平吉談：村田吾一「昆布古記」『知床のすがた』)

昆布漁の北上

昆布漁は、人々に一攫千金の夢を見せる力がありました。

大正時代から昭和初期の昆布漁は、夏のシーズン中はだれでも、いくらでも採ることができました。羅臼の昆布は昔から高級品。仕事は家族で行うため、定置網漁に比べると規模も小さくて済み、「一年を一月で暮らす…」と言われるほど割の良い仕事と言われていました。

植別村にも、新規参入者がゆっくと増え続け、昆布漁を行う漁家も北上していきます。大正時代のはじめには知床岬先端部・赤岩地区までも昆布漁師が訪れ、漁が行われるようになっていきます。中心地も植別から羅臼周辺に移り、1930年（昭和5年）には村名が羅臼村に改正されます。

第二次大戦後、1949年（昭和24年）には村が国後島などからの戦後引揚者・移住者を受け入れました。昆布漁の従事者は羅臼全村で375戸、操業船数は508隻になりました。このとき、昆布漁には一家族につき操業船一隻という決まりは、まだ作られていませんでした。

第2章 先端部での昆布漁

岬へ向かう家族

知床岬の先端部は「赤岩(あかいわ)」と呼ばれています。遠浅の海に昆布がびっしりと密生している好漁場で、潮の流れが早く、実入りの良い良質な昆布が取れました。先端に行くほどオホーツク海気候の影響を受け日照りがよく、石浜では昆布を10枚ほど重ねて干せたほどです。

昆布漁には好条件の赤岩ですが、移り住むのには大変な労力が必要でした。そのため、赤岩で昆布漁が行われるようになったのは、大正時代に入ってからでした。

当時[1920年代(大正末期)ごろ]、昆布漁に従事していたのは百戸余り。番屋生活をする本格的な漁家は五十戸足らずだった。だから一地区に番屋は五軒足らず。まして羅臼から一番遠路の赤岩はたったの四軒だった。

(赤岩地区の昆布漁業者、長谷川勇さんと小倉タマさんの回想：
北海道新聞 昭和42年8月15-16日)

戦時の農林漁業の増産促進運動の影響、戦後の引揚者などの受け入れも重なり、北海道全体に新しい移住者が増えた時期でした。羅臼も時代の波を受け、たくさんの移住者を受け入れます。戦後は、操業船はひと家族一隻という決まりができるほど、昆布漁開業者が増えました。

赤岩の昆布番屋は、1949年(昭和24年)に18戸。赤岩地区が最盛期を迎える1960年代ごろ(昭和40年代)には、56戸の番屋がところ狭しと立ち並びました。

念願の番屋

昆布漁師・長谷川美登理(みとり)は、赤岩の最初期の入植者の一人。息子・勇(いさお)を連れ、1916年(大正6年)から赤岩で昆布漁に従事していたと伝えられています。最初の暮らしは流木を寄せ集めてピラミッド型の小屋をつくり一月を暮らす、一時しのぎの生活でした。漁の途中で食料が底をつくこともあったそうです。粗末な番屋での過酷な生活は、昭和に入ってからも続きました。

エンジンがまだ無かった時代、赤岩までの道のりは、櫓こぎの木造船「川崎船」を借りて向かいました。うまく風に乗れば8時間、運が悪ければ2日もかかる長旅。丈夫な番屋を手に入れることは、赤岩で昆布漁をする家族一軒一軒の目標でした。しかし赤岩の生活には、人や生活物資を運ぶだけでも毎年大きな苦勞がありました。

知床半島、国立公園になる

知床半島が国立公園に指定されたのは1964年（昭和39年）のこと。通常は地元側の強い要請を経て候補に選ばれるものですが、知床は「地元から陳情がなくても、真にふさわしい所はとりあげよう」という国の自然公園審議会側からの直接の指名。

日本列島全体が世界的に類のない急速な高度成長期を迎え、あらゆるものが消費される時代を迎える中、異例の決定。道庁や地元斜里・羅臼町には寝耳に水の知らせでした。

これにより、赤岩を含めた知床岬先端部のエリアは、他数ヶ所と共に「特別保護地区」に指定され、原則として一切の原状変更が認められない自然保護区になりました。国立公園の制度の中でも、この「特別保護地区」は、国際自然保護連合の国立公園の定義「開発や居住を防止し排除する」状態に最も近いルールとして、国際的にも評価が高い制度でした。

実際は、羅臼をロケ地とした映画『地の涯てに生きるもの』（1960年公開）の影響や、網走～ウトロ～羅臼間の観光船巡航がはじまるなど、観光地として活気を帯びていくことになります。

第3章 知床のすがた

番屋のくらし

国立公園指定と同じ1964年（昭和39年）に、羅臼町ではNHK羅臼テレビジョン放送が始まります。すぐにNHKの人気紀行番組「新日本紀行」の取材が羅臼町へ入り、昆布漁師や定置網漁師の生活が、全国のお茶の間へ紹介されました。

今回、この時の取材スタッフが撮影したスナップショットが、お世話になった漁師たちの家それぞれに贈られていたことがわかりました。

ここで展示する写真は本間家の家族アルバムに大切に綴じられていたものです。撮影の難しい、暗い室内の作業風景もしっかりと写真に収められおり、赤岩で生活する家族の姿が鮮明に捉えられています。

こどもたちの遊び

昆布番屋の生活では、こどもたちも大事な働き手。先端部に向かう小・中学生は、1964年（昭和39年）時点で、370人もいたそうです。先端部で操業する昆布漁師の家のこどもは、通学の行き来の問題もあり10日ほど長い夏休みをもらっていた時代もありました。

先端部での生活では、先生たちが「巡回指導」と呼ばれる家庭訪問を行い、それぞれの地区のこどもたちを集めて青空教室を開いてくれました。こどもたちと勉強したり合唱をしたりして、また学校で会いましょうと帰っていったのだそうです。巡回の先生は4人ほど。連絡船を使い北上しながら、それぞれの地区を夏休み中2、3回訪れていきました。先生は番屋のお世話になったり、テントを使ったりしての寝泊まりですが、こどもたちにも大人たちにも歓迎されながらの巡回でした。

夏休みも終わりになるころ、こどもたちは連絡船に乗せられ、他の家族より先に番屋から離れます。祖父母の家や学校に寝泊まりさせてもらいながら、学校に通っていた家もあったそうです。

岬のピクニック

どの番屋からも見えるように高く掲げられた白い旗は、操業日を知らせる目じるし。赤い旗が上がるのは休漁日の目じるし。今も変わらない昆布漁の風景の一つです。

休みの日、地元の人たちは岬を西まで回り込みピクニックに向かいました。赤岩から船でアブラコ湾まで行き磯遊びをして帰ってきたり、お弁当を持って灯台の下で食べたり、本当に時間のあるときは岸沿いを歩いて知床岬灯台まで歩いて行きました。

日々の大変な労働の中でのささやかな癒しの場所として、地元の人たちに本当に愛された場所が、知床岬の突端でした。

赤岩以北の沿岸部は昆布番屋が立ち並び、岩浜には干された昆布がひしめき合う、地元住人にとっては仕事と生活の場所。町外からの観光客が気軽に写真を撮るような場所ではありませんでした。しかし岩礁地帯のアブラコ湾から知床岬灯台までの道のりは、連絡船を使って訪れる観光客たちも多く、気軽に遊びに行けるレジャーの場所として利用されていたようです。地元の人も、町外の人も、岬の先端でレジャーを楽しむ様子が、多く写真に残っています。

第4章 秘境としての知床

冬の知床岬踏破！

昆布の漁期は7～8月。昆布の収穫が終わると、家族は番屋の扉や窓を釘で打ち付け、船や漁具を引き上げて帰る準備をはじめます。同じく先端部で操業する定置網漁の番屋小屋も、本格的な冬になる前には市街地へ引き上げてしまいます。

1969年（昭和44年）、「冬の流氷、知床の先端を写してみたい。」と情熱を燃やし続け、やっと準備を終えた2人のアマチュアカメラマンがいました。羅臼町役場職員の川端隆（当時29歳）と郵便局員の中町保正（当時31歳）です。川端は、知床岬の先端に昆布番屋を持つ家の出身で、子供の頃から毎年昆布漁を手伝っていました。しかし、流氷のくる真冬の知床岬を訪れた人は、川端を含めてまだ誰もいませんでした。

2人は大きな中判カメラを持ち、発売したてのインスタントラーメンや特別仕様のテントなどの大荷物を携えて羅臼から出発。流氷の上を歩きつづけること18日間。ウトロへたどり着いたとき、歩いた距離は約100キロに達しました。帰宅するころには、冒険成功の快挙がメディアに報じられており、新聞やテレビに彼らの撮影したイメージが何度も取り上げられました。

彼らの純粋な好奇心が、凶らずも、厳しさと静寂さに包まれる秘境・知床という人々のイメージをさらに強めることになりました。

「留守番さん」との出会い

冬、定置網の大きな番屋では、漁網などの大量の漁具を全て持ち帰ることができないので「留守番さん」と呼ばれる老人を小屋に残します。ネズミなどから漁具を守り管理するために、留守番さんは厳しい冬を番屋の中で過ごします。番屋同士の連絡も行えず、流氷が溶け次の春に番屋の家の者がやってくるまで、ひとり留守番を続けるのが留守番さんの役目です。

川端さんと中町さんは、岬の探検中に各番屋でこの老人たちと出会い、驚きとともに迎えられ、初めての来客として大歓迎をされました。ストーブを前にして、彼らの人生、真冬の番屋生活の話聞かせてもらいました。

留守番さんたちは、日本の動物物語作家・戸川幸夫の小説『オホーツク老人』のモデルになっています。この小説を原作にした映画撮影が、1960年（昭和35年）に羅臼村周辺で行われ、同年に映画『地の果てに生きるもの』が発表されました。主演の森繁久弥(もりしげひさや)は映画、舞台、テレビで活躍した当時人気の喜劇俳優。映画ロケでの村民の全面協力で森繁は感謝し、クランクアップ直後に、のちの『知床旅情』の原曲、『さらばラウスよ』という曲を生み出しました。

メディアの影響

番屋は漁業小屋で、ホテルではないから、行けば必ずとめてくれるというものではないが、みんな親切で、頼みこめば困っていれば気もちよく泊めてくれる。ただし、番屋のみんなと同じに起居する気でなければ、いけない。

(戸川幸夫『野性への旅：知床半島』1961年(昭和36年)、新潮社)

1970年(昭和45年)には森繁が歌った『知床旅情』を加藤登紀子(かとうときこ)がカバーし大ヒット。この時、大阪万博が開催され、日本じゅうが自分の見たことのない世界へ目を向けようと望む時代がやってきます。日本国有鉄道(国鉄)も個人旅行向けのキャンペーン「ディスカバージャパン」を発表し、安価な周遊券を発売するなどしており、個人客、女性や学生客が爆発的に増えた時代でした。

国鉄のキャンペーンのCMやポスター、その影響を受け地方を歌った様々な歌謡曲によって、北海道や九州への旅行客は増大していきます。彼らの大半は大学生で、横長の大きなリュックサックを背負っていたので「カニ族」と呼ばれました。すでに有名な観光地ではなく、離島や知床、襟裳岬など「最果て」を目指す人たちでした。羅臼もウトロも交通がまだまだ不便で、さらに羅臼では、彼ら向けの安宿は、「羅臼ユースホステル」(現ギャラリーミグラード)しかなかった時代です。

しかし彼らは、さらに最果ての岬の先端部へ向かいます。もし海が時化たり、トラブルで帰れなくなったりしたら、近くの番屋でお世話になって、地元の人と一時交流して帰っていく。それが知床の旅でした。旅から帰った後には、お世話になった地元の人へ、手紙や写真を送ることもありました。

現代の昆布漁をめぐる

60～70年代には、羅臼昆布のダンボール包装の開始、機械乾燥機の発明、養殖試験の成功など、羅臼の昆布漁が大きく変化していきました。岬先端部では、操業船の性能の向上で「日帰り組」が増えていき、赤岩で番屋暮らしをする家族も急速に減っていきます。赤岩で昆布漁を行う家は現在2軒のみです。

80年代に入ると、斜里町ウトロ側では林野庁による国有林伐採への反対運動を契機に、森だけでなく離農地の開発も阻止しようと、全国的な自然保護運動が始まりました（しれとこ100平方メートル運動）。これがきっかけで、知床が、自然保護のメッカとしても全国で注目され、世界自然遺産登録の道を歩むこととなります。2005年（平成17年）には、約7年の歳月を経て様々な人の努力が実り、知床半島一帯が世界自然遺産に登録されます。しかし、自然を守る一方で、赤岩での賑やかな生活の歴史は「静寂な原生自然」というイメージに置き換えられようとしています。

知床羅臼町観光協会では、最古の番屋の所有者・長谷川正人さんや、元赤岩住民の方々の伝承を元に、2014年（平成26年）から羅臼昆布の歴史・文化を伝えるためのエコツアーを開催しています。この活動は、一時的な自然体験としてだけでなく、自然と共に暮らし働いてきた羅臼の人々の生活観――日々の苦労やよろこび――に目を向けることのできる貴重な機会となっています。